

工業高校卒業生に学ぶ

元札幌工業高等学校長 吉 岡 昇
(北海道の工業教育を推進する会理事)

1. はじめに

この4月から、いよいよ新学習指導要領による授業が展開される。今回改訂された基本的なねらいは、「生きる力を育成する」ことにあり、「豊かな人間性」「自ら学び、自ら考え、問題を解決する能力」の育成を目指し、「ゆとりある教育」を「各学校の創意工夫」のもとに展開することが、求められている。

各学校では、この具体化に向けて鋭意研究を進め、また、本誌に紹介された優れた研究や取り組みを参考に、工夫を重ねてこられたものと思う。

「生きる力」を自らの中に、はぐくみ育てるためには、何よりもまず、自ら、進んで、積極的に取り組むことへの切っ掛けを掴むことが大切になる。その動機や手がかりの一つとして、工業高校卒業生の活動実績を知ることにも有効な方法であると考える。

工業高校に学ぶ生徒が、先輩たちの生き方、実績から刺激を受け、この先の自分の夢を描き、その実現に向かって確かな学生生活を送ることを期待したい。また、それを基盤として、よりよい社会生活を実現することを願うものである。

ここでは、本道工業高校卒業生の事例の一端に触れながら、考えてみたい。

2. 異色の先輩たち

①工業卒の国務大臣

私の最後の勤務校である札幌工業高校の大先輩に、西田信一氏がおられる。氏の漢詩が、小林一也著「日本工業教育史」(実教出版)の冒頭に紹介されている。

氏は、小学校高等科卒業後、郵便局の集配人、国鉄の保線助手として家計を助けていたが、「このままではいけない。何としても上級の学校へ進学したい」と母に打ち明ける。病弱の父が死去して2年、母が和裁の仕事で一家を支えているとき、母と妹1人、弟2人を残して、働き手の自分が札幌に出ていくことは、大変なことであった。しかし、息子の勉強好きを観ていた母親は、気持ちよく応諾してくれた。札幌工業へ進学したのは数えて20歳、遅い旅立ちではあったが、このことが氏の人生を大きく決定づけることになる。

札幌工業で土木を専攻、大正13年(1924)卒業後、苫小牧工業の助教諭。4年後、土木係主任として苫小牧町(現苫小牧市)役場に入り、後に助役、町長として敗戦前後の困難期に活躍。その後、北海道議会議員、参議院議員。佐藤内閣では、科学技術庁長官・北海道開発庁長官として力を発揮された。

札工、苦工にスケート部を創設、王子製紙アイスホッケー部コーチとして全日本選手権に初優勝を飾るほか、世界スピードスケート選手権大会(スイス=ダボス)、第10回冬季オリンピック大会(フランス=グルノーブル)の日本選手団団長を務める。また、母校札幌工業高校の創立記念行事の協賛会長を50、60、

70, 80周年と4度も務め、母校に対する思い入れは人一倍強いものがあつた。

札幌70周年当時、私は校長の職にあつたが、西田協賛会長が「札幌工業に行つて勉強したいという強い意志、苦しい家計にあつてそれを許してくれた母の後押し、教職へと薦めてくれた恩師の助言、町役場に誘つてくれた町長、その時々々に良き人に支えられ、感謝の一念で夢中で頑張つたことが人生を大きく変えてくれた」と話されていたことが、印象深く残っている。

②東京地検特捜部長

札幌琴似工業高校の第3代校長中神肇氏は「私の函館工高時代の教え子に、田中角栄を連行したのがいる」と語っていた。その人が、昭和28年(1953)函館工業高校電気科を卒業の松田昇氏である。

伺うところによると、氏は、弁護士になりたいという強い思いで上京。中央大学法学部の2部に入学。3年のとき1部に移つたが、4年間会社に勤めながら大学に通う文字通りの苦学生。卒業後も会社勤めを続けながら勉強に打ち込み、司法試験に合格。司法研修を終えて検事に任官したのは、工業高校を卒業して上京してから10年が経過していたという。

氏は、東京地検特捜部検事の時、ロッキード事件という日・米にまたがる戦後最大級のスキャンダルの捜査を担当、田中角栄前内閣総理大臣を、目白の屋敷から任意同行する役割も果たした。また、この事件の公判では、高検特別公判部長の職にあつて、かの右翼の大立者児玉誉士夫の取り調べを担当、アリバイを崩し、裁判の行方に大きな影響を及ぼした。後に「特捜の花」・東京地検特捜部長、現在、金融破綻から国民を保護する預金保険機構の理事長として活躍されている。

氏は、弁護士志望が検事になったことにつ

いて「私が上京するときに、背中をがんと押してくれた恩師、会社で陰ながら応援してくれた同僚、その他いろいろな人のお世話になって今日の私がある。そのことを考えると、自分の都合だけで検察官が足りなくて刑事司法がうまくいかないのを放つてもおけまい。新撰組に入るような気持だつた」と大学の後輩に語つておられる。周りへの感謝の気持ちを忘れずに、検察畑に新たに挑戦していった、その人柄に敬服するのみである。

③北海道百年記念塔の設計者

札幌市、江別市、北広島市の3市にまたがる野幌丘陵に野幌森林公園がある。この一角に、昭和43年(1968)の北海道百年を記念して、北海道立の開拓記念館、開拓の村などの施設とともに、百年記念塔が設置されている。



北海道 100年記念塔

この記念塔は、北海道の開拓に尽くされた先人の苦勞に対し、感謝の心と、未来を創造する道民の決意を示すという趣旨のもとに、5億円の建設資金を投入して建造された。

この基本設計は、公開競技設計とされ、全国から応募のあつた299点の中から、昭和32年(1957)札幌工業高校建築科卒業の井口健氏の作品が、最優秀作品に選ばれた。

建設の趣旨を、いかに造形的に表現するか、デザインの追求、外力の予測、風洞実験、振動

実験など、あらゆる角度からの静的・動的解析を加えながら全精力を傾注したに相違ない。

氏の作品は、「風雪百年の標語にふさわしく耐候性鋼板張の塔身に刻まれた荒々しいタッチは、酷しい風雪と闘った鎧を、大きく広がった基底は大地にしっかりと根を下ろした原始の大樹を思わせ、また鋭く尖って天を指向する先端は輝く未来の創造に向かってたゆむことない道民の気魄を象徴するもので最も北海動的で建設の趣旨に叶うもの」と、高い評価を受けたのであった。

塔の高さは、開道百年にちなんで100m。この塔を仰ぎ観るたびに、私は、工業卒業生の気概の一端に触れる思いで胸が熱くなる。北の大地北海道のシンボルタワーは、工業卒建築士の熱い思いを秘めて、訪れる人びとに勇気と力を与え続けてくれることだろう。

3. 自称“劣等生”は、社会の優等生

①通商産業大臣表彰受賞

私の新任教員時代に、美唄工業高校で最初に担任した生徒の中にS君がいた。彼は小柄で、ひ弱に見えた。遠方の歌志内町（現歌志内市）からの汽車通学生。朝6時には家を出て、夜の7時ごろに帰宅する毎日の繰り返し。通学にエネルギーを費やすせいか、学校では万事に控え目で、電気実習の班別学習でも、いつも一歩引いていて、他の生徒を頼りに傍観していることが多かった。実習レポートなども、滞りがちであった。毎学期の試験に目の色を変えるでもなく、成績表にも淡々として、学校に通うことだけを楽しみにしている風であった。

昭和27年（1952）に卒業の後は、地元の炭鉱に電気係として勤務。ようやく10年を経たころ、エネルギー政策の転換により炭鉱が閉山。失職の憂き目に遭うが、これがS君の人生を大きく変えることになる。

電気保安業務関係に職を得たS君は、炭鉱時代に体得した経験と責任感を武器に着々と業績を挙げて、学校時代の控え目から前向きに一大変身、出張所長、支部長、本部の部長と昇進、この間、北海道通商産業局長表彰を受け、平成9年（1997）には通商産業大臣表彰を受賞する荣誉に輝いた。

安功 劣等生 通商産業大臣表彰受賞



通商産業大臣表彰受賞のS君

卒業20年を契機にクラス会が開かれることになったが、クラス会の幹事役は一貫してS君が担当。会の冒頭、毎回のように「劣等生の私がここで司会をするのは……」と切り出すS君の挨拶にどっと笑いが起こる。級友は暖かい拍手を贈り、「いや、S君こそ本家の優等生だ」と認め合うのだった。

昨年、卒業50年記念クラス会が、S君たち有志の周到な準備のもとに、50年前と同月同日の3月10日に開催された。このときもS君は、過去14回のクラス会、12回の小会合の日時・場所・参加者等を記録したA4判14ページの小冊子を作成してきた。さらに驚いたことには、これまでに死去した級友14名の命日が明記され、29名全員の住所・電話番号を載せた名簿が添えられていた。卒業50年を経ると所在不明者が何人かはいるものだが、S君の尽力で、名簿には空欄がなかった。これには、一同感服するほかなかった。

新任教員当時の私は、S君の一面しか見ることができず、体格でも末尾なら成績もそれ

で仕方がないか、と思っていた節がある。今になって不明の至りだが、「先生のお陰で卒業させてもらって……」と毎回必ず付言するS君に、こちらが助けられている有様。大きく変容を遂げたS君に感服している。

② 65歳で大学卒業

S君が卒業した昭和27年（1952）、同じく歌志内町からF君が入学してきた。私は、引き続きそのクラスを担当することになった。

F君は、体格的にはS君より優れていたが、やはり遠距離通学のせい、S君と同じような過ごし方をしていた。どちらかと言えば、理系よりも文系向きであったかと思う。

2人とも、元英国首相のチャーチル型のタイプ。学校では成績不振でも、社会に出てから力を発揮するタイプだという。当時、新米教師の私には思いもつかないことだから、F君の将来について心配したのもだった。

そのような危惧をよそにF君は、一級電気工事施工管理技士ほか各種の資格を取得し、会社を定年退職するや、社会人入学制度を活用して旭川大学への進学を決意する。「子供が大きくなったら大学にいったら勉強したい」長年、この夢を温めながら懸命に働いてきた。そして、その夢を現実のものとして大学入学を果たした。卒業生の還暦を機に集まった久し振りのクラス会



F君（写真右）の新聞記事

で「これから大学に行って勉強するんだ」というF君に級友一同驚嘆したのもだった。この歳になって大学に？という級友に「人間は死ぬまで勉強」と生き生きと語っていたF君。それから4年、息子以上に歳の離れた若者と机を並べての勉強に戸惑いも多かったと思うが、昨年3月20日、旭川大学の卒業証書を手にした。翌朝、大きく報道された写真からF君の喜びが伝わってきた。

4. おわりに

人生は選択の連続である。そのとき何を選択するかは、その人の知恵と人柄によって決まる。本当に自分が好きだと思うものを選択したとき、心底から“生きること”の喜びを実感できる。好きだからこそ熟達も早くなる。

先に、本道工業学校卒業の5人の例をあげたが、クラスの先頭を切って走った人も、後から追っていった人も、自らが選択して新たな環境、立場におかれたとき、そこに喜びを見だし、明確な目的意識を持った。その目的を達成するための手法を確立し、集中して取り組んだ。自分を支えてくれた周りの人々に、感謝の気持ちを忘れなかった。こんなところに、社会において自分の天分を生かし、役割を果たし得てきた何かがあったのだと思う。

工業教育には、教科の学習や実験・実習の場の中に若者の知恵と人柄を磨く営みのあることを卒業生から学ばせてもらった。

昨年3月、S君たちのクラス会、F君の大学卒業のニュースなど続けて教師冥利に尽きる感動を体験できた。あれから1年、今年も3月、卒業シーズンがやってきた。新たな門出に臨み、卒業生たちの胸中は前途への希望とつかずかな不安とが交錯して複雑と思うが、目先を追い求めることなく、30年先、50年先を見据える大きな眼をもって立ち向かってほしいものと願っている。